



## 主観の客体化：他者の思いをどのように受け止め、伝えるか

著者	廣瀬 幸生
雑誌名	文藝言語研究
巻	76
ページ	73-98
発行年	2019-09-30
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2241/00157974">http://hdl.handle.net/2241/00157974</a>

## 主観の客体化

—他者の思いをどのように受け止め、伝えるか—

廣瀬 幸生

### 1. はじめに

我々はことばで思いを表現し、その思いをことばで他者に伝えることができる。言語によるコミュニケーションはことばのやりとりではあるけれども、ことばがその主体の思いを表現している点において、思いのやりとりと見る必要がある。

筆者は1988年の『文藝言語研究・言語篇』第14巻に、「私的表現と公的表現」と題する拙論（廣瀬1988a）を発表し、他者に思いを伝達するレベルの言語表現を「公的表現」、他者への伝達を意図せずに、主体の思いを表現するだけのレベルの言語表現を「私的表現」と呼ぶとともに、この区別に対応して、言語主体としての話し手を、伝達・報告の主体としての「公的自己」と思考・意識の主体としての「私的自己」に解体することの重要性を主張した。それ以来、私的自己・公的自己の区別を基盤として、日英語の引用・話法、視点、照応、省略、主観性などに関わる諸現象を分析し（廣瀬1988b, 1997, 2001, 2006, 2008, 2009, 2012；Hirose 1995, 2000, 2002, 2014, 2018など）、さらには言語文化的意味合いについても考察してきており（Hasegawa and Hirose 2005；廣瀬・長谷川2001a, 2001b, 2007, 2010）、もっとも最近では、「言語使用の三層モデル」という、文法と語用論の関係を扱う一般理論を提案するに至っている（Hirose 2013, 2015；廣瀬2016a, 2016b, 2017；廣瀬ほか2017）。

本稿は、このような研究の流れを背景に、私的自己・公的自己論のさらなる応用研究として、「他者の思いを話し手がどのように受け止め、伝えるか」という「主観の客体化」に関する理論を新たに提案することを目的とする。そのために、本稿の前半では、これまでの研究をもとに私的自己・公的自己論の概要を示し、後半で主観の客体化という現象について、特に英語を中心に論じることとする<sup>1</sup>。

## 2. 私的自己・公的自己論

### 2.1. 私的表現・公的表現

上述のように、言語主体としての話し手には公的自己と私的自己という二つの側面がある。公的自己とは聞き手と対峙する伝達・報告の主体としての側面であり、私的自己とは聞き手の存在を想定しない思考・意識の主体としての側面である。公的自己・私的自己は、公的表現・私的表現という異なるレベルの言語表現の主体と特徴づけられる。公的表現とは言語の伝達の機能に対応する表現で、聞き手に対する話し手の伝達意図が想定されるレベルの表現である。一方、私的表現とは伝達を目的としない、言語の思考表現機能に対応する表現であり、話し手の思いを言語化しただけで、聞き手への伝達意図が想定されないレベルの表現である。

言語表現のなかには聞き手の存在を前提とするものがある。そういう「聞き手志向表現」の典型例として、日本語には、「よ」や「ね」など一定の終助詞、「立ちなさい・立ってください」などの命令・依頼表現、「おい」などの呼びかけ表現、「はい・いいえ」などの応答表現、「です・ます」など丁寧体の助動詞、「(だ) そうだ・(だ) って」などの伝聞表現などがある。これらの聞き手志向表現は、定義上、公的表現としてしか用いられず、聞き手志向表現を含む句や文もまた、聞き手への志向性をもつことになり、公的表現として機能する。一方、聞き手志向表現を含まない句や文は、話し手が他者への伝達を意図して用いないかぎり私的表現であり、一定の思いを表現したものにすぎないと考えられる。

公的表現は話し手の伝達態度にかかわるのに対し、私的表現は話し手の心的状態に対応する。心的状態は「思う」を始めとする思考動詞によって記述される。思考内容を表す言語表現のレベルは私的表現でなければならないので、思考動詞はその引用部に私的表現しかとれないという制約を受ける。たとえば次の(1)-(2)を見てみよう(以下、<priv >は私的表現を、[pub ]は公的表現を表す)。

- (1) a. 春男は、<priv 外は雨だ>と思っている。  
 b. 春男は、<priv 外は雨にちがいない>と思っている。  
 c. 春男は、<priv 外は雨だろう>と思っている。
- (2) a. \*春男は、[pub 外は雨だよ] と思っている。

- b. \*春男は、[pub 外は雨です] と思っている。
- c. \*春男は、[pub 外は雨だって] と思っている。

(1) では下線部の表現がそれぞれ断定・確信・推量という心的状態を表すので、引用部は私的表現で文法的である。それに対し(2)では、下線部の聞き手志向表現が引用部全体を公的表現にするため非文法的となる。

一方、「言う」を始めとする発話動詞は思考動詞と異なり、その引用部に私的表現も公的表現もとることができる。たとえば(3)では、公的表現としての発話がそのまま引用されている。

- (3) a. 春男は、夏子に [pub 外は雨だよ] と言った。
- b. 春男は、夏子に [pub 外は雨です] と言った。
- c. 春男は、夏子に [pub 外は雨だって] と言った。

(3)の引用部は、秋男の夏子に対する伝達態度とともに、雨だという秋男の思いも伝えているので、(4)のように、秋男の発言を私的表現で報告することも可能である。

- (4) 春男は、夏子に<priv 雨だ>と言った。

英文法でいう話法の区別から言えば、(3)が直接話法で、(4)が間接話法にあたる。

このことから一般に、「直接話法は公的表現の引用が可能なのに対し、間接話法は私的表現の引用である」という仮説が成り立つ<sup>2</sup>。この仮説は次の三点を意味する。第一に、直接話法は伝達レベルの発話を引用することが可能なのに対し、間接話法は発話そのものではなく、発話によって伝えられる思いを思いのレベルで引用する。第二に、思考動詞が間接話法をとれるのは、発話主体の発話からその主体の思いが理解できるからである。第三に、間接話法が私的表現レベルの思いを記述する点では、発話動詞と思考動詞の対立は中和される。

上記仮説は英語にも適用可能であり、発話動詞は直接話法も間接話法もとれるが、思考動詞は一般に間接話法はとれるのに直接話法がとれないという事実が説明される。たとえば、以下の(5)は直接話法の例だが、sayは容認される

のに、believeやsupposeは容認されない。ただしthinkが例外的なのは、いわゆる心内発話を導入する発話動詞の用法をもつからである（詳細はHirose (1995)や廣瀬・長谷川 (2010)を参照）。一方、(6)の間接話法は、これらすべての動詞で容認される。

- (5) a. Scott said to Wendy, “I am happy.”  
 b. Scott {\*believed/\*supposed/thought}, “I am happy.”
- (6) a. Scott said to Wendy that he was happy.  
 b. Scott {believed/supposed/thought} that he was happy.

ちなみに、関連性理論では、(6a)のような発話動詞の間接話法は「発話表象」(public representation)、(6b)のような思考動詞の間接話法は「心的表象」(mental representation)と呼び、区別する(Sperber (2000)や内田 (2011)を参照)。しかしながら、上記仮説が強調するのは、発話表象も心的表象も私的表現レベルの表象、つまり、思いを表したものであるという点で一般化可能ということであり、この一般化こそが、直接話法との対比で間接話法の存在意義を明らかにするのである（より詳細な理論的意味合いは、特に廣瀬 (2008)を参照）。

## 2.2. 私的自己中心の日本語・公的自己中心の英語

私的自己と公的自己に関しては、日英語で次のような違いがある（詳細はHirose (2000)や廣瀬・長谷川 (2010)など）。日本語では私的自己は「自分」という固有のことばによって表されるが、公的自己を表す固有のことばはないため、「ぼく、わたし、お父さん、先生」など誰が誰に話すかという発話の場面的要因に左右される様々なことばが代用される。一方、英語では公的自己はIという一人称代名詞によって表されるが、私的自己を表す固有のことばはないため、当該私的表現が一人称のものか、二人称のものか、三人称のものかにより、I/you/he/sheという人称代名詞が転用される。

この日英語の違いは、特に間接話法の文法に反映される。日本語には私的自己固有の「自分」があるので、話し手が誰であっても、その私的自己は「自分」で表すことができる。たとえば例(7)において、「自分は何を考えているのだろう」という思いはそれ自体で自己完結的な意識であり、その意識の持ち主が誰か、つまり、「ぼく」か「きみ」か「彼」か、ということとは独立して解釈可

能である。一方、英語では、(8a) のような表現はできないため、(8b) のように、私的自己の意識はその外側に公的自己を想定し、その公的自己から見た人称代名詞と時制形式が用いられる<sup>3</sup>。

- (7) 自分は何を考えているのだろうか (と {ぼく／きみ／彼} は思った.)  
 (8) a. \*What be self thinking?  
 b. What {was I/were you/was he} thinking? {I/you/he} wondered.

この違いから次のことが言える。日本語で私的自己の意識がその意識内で自己完結的に語ることができるのは、日本語が私的自己中心の言語だからであり、それに対し、英語では私的自己の意識は当該意識の外側に公的自己を想定しないかぎり語ることができないのは、英語が公的自己中心の言語だからである。

英語では、一人称に関しては公的自己也私的自己也Iとなり、言語形式上は区別できないのに対し、日本語ではいわゆる一人称代名詞の「私」は公的自己であり、私的自己の「自分」とははっきりと区別される。したがって、同じ話し手が「私」から「自分」に移行すると、他者と向き合う伝達の場合から個人の内的意識へと導かれることになる。たとえば、次の実例について考えてみよう。

- (9) 中西先生の、そうしたバックボーンを見て、私はうちのめされました。

いくら、自分で多くの、内外の新聞を集めても、直接大統領の補佐官に話を聞ける中西先生に到底かなう訳がない。さらには、情報を分析する背景、つまりは知的な蓄積についても自分はかなう訳がない。

(福田和也『ひと月百冊読み、三百枚書く私の方法』)

この例の第1段落における「私」は、デス・マス体で読者に語りかける著者の公的自己を表す。第2段落では、その著者が「うちのめされた」ときに感じた内容が、読者との関係から離れて個人の意識内で内省する形で描かれている。そしてその部分には著者の私的自己を表す「自分」が用いられているのである<sup>4</sup>。

このように日本語では、公的自己による他者への語りかけと私的自己による内的意識の描出が峻別しやすく、それは正に日本語が私的自己中心の言語だからと言える。

### 2.3. 私的表現中の公的表現

私的・公的表現と私的・公的自己という考え方をを用いると、たとえば次のような例において、「ぼく」の解釈が二通りに可能である点が説明できる。

(10) 春男は、ぼくは自転車に乗れないと言っている。

一つは「ぼく」が春男を指す読みで、この場合は英語の直接話法に相当する。もう一つは「ぼく」が伝達者、つまり文全体の話し手を指す読みで、この場合は間接話法である。この解釈上の違いは、引用部全体が公的表現なのか、それともその一部である「ぼく」だけが公的表現なのかの違いによる。したがって、(10)の引用部には(11a)と(11b)のような二通りの表示が与えられる。

- (11) a. 春男は、[pub ぼくは自転車に乗れない]と言っている。  
 b. 春男は、<priv [pub ぼく]は自転車に乗れない>と言っている。

(11a)では引用部全体が公的表現で、その主体は春男だから、公的自己を表す「ぼく」は春男に結びつけられる。それに対し、引用部が私的表現である(11b)では、春男は私的表現の主体なので「ぼく」は春男には結びつかず、その結果、伝達者に結びつけられる。英語の例(12a)と(12b)についても、一人称代名詞Iの解釈は同様に説明することができる。

- (12) a. Haruo says, [pub I can't ride a bicycle]. (直接話法)  
 b. Haruo says that <priv [pub I] can't ride a bicycle>. (間接話法)

公的表現を引用部にとる(12a)は直接話法であり、IはHaruoを指すのに対し、私的表現を引用部にとる(12b)は間接話法であり、公的表現のIは伝達者を指すことになる。

例(10)とは対照的に、思考動詞が用いられている次の文では「ぼく」はいまいではなく、伝達者を指す解釈のみが可能である。

(13) 春男は、ぼくは自転車に乗れないと信じている。

思考動詞は発話動詞と異なり、引用部に私的表現しかとれないので、(13)に

許されるのは(14b)の解釈だけであり、(14a)は許されないからである。

- (14) a. \*春男は、[pub ぼくは自転車に乗れない] と信じている。  
 b. 春男は、<priv [pub ぼく] は自転車に乗れない>と信じている。

このような「ぼく」の解釈上の特性は、(15)における終助詞「ね」の解釈と平行的である点にも注意しておきたい。(15a)では、「ね」は引用部全体を支配する文末表現であり、引用部全体を公的表現とする。しかし、思考動詞は私的表現しかとれないので(15a)は非文法的となる。一方(15b)では、「ね」は伝達者による一種の挿入表現であり、伝達者の聞き手に対する発話態度を表していると解釈されるのである。

- (15) a. \*夏子は、[pub 山田先生はすばらしい先生だね] と信じているんだ。  
 b. 夏子は、<priv 山田先生は [pub ね], すばらしい先生だ>と信じているんだ。

英語も日本語と同様であることが、以下の(16)-(17)の例から分かる。思考動詞のbelieveはその補部に私的表現しかとれないので、公的自己を表すIは主語のHaruoを指すことはできず、また、公的表現のyou knowも主語のNatsukoに帰することはできない。どちらも公的自己としての伝達者に結びつけて解釈されることになる。

- (16) Haruo believes that <priv [pub I ] can't ride a bicycle>.  
 (17) Natsuko believes that <priv Mr. Yamada, [pub you know], is a wonderful teacher.

このように日本語においても英語においても、間接話法では他者の私的表現中に伝達者の公的表現が介入するということが起こる。言い換えると、私的表現は間接話法では他者の思いに対応するので、その思いを伝えるときに、伝達者自身の表現や解釈が入り込みうるのである。これは、間接話法補部における「指示の不透明性」(referential opacity)と呼ばれる問題とも関連する。

Hirose (1986) からの例を用いていうと、たとえば(18)のような文脈では、

(a)の「アメリカ合衆国初代大統領は正直者だった」が真で、かつ、(b)の「アメリカ合衆国初代大統領はジョージ・ワシントンだった」も真であるならば、(c)の「ジョージ・ワシントンは正直者だった」も真となる。

- (18) a. The first president of the U.S. was an honest man.  
 b. The first president of the U.S. was George Washington.  
 c. George Washington was an honest man.

このように同一指示対象をもつ表現を入れ替えても、文の真偽値が変わらない文脈を指示的に透明な文脈と呼び、そうでない文脈を指示的に不透明な文脈という。

間接話法がかかわる(19)のような文脈は、指示的に不透明な文脈となる。つまり、(a)と(b)が真であっても(c)が真とはならないからである。

- (19) a. Columbus believed that the land he reached was India.  
 b. The land Columbus reached was America.  
 c. Columbus believed that America was India.

(19a)の「コロンブスは、自分の到達した地はインドだと信じていた」は歴史的に真だと言われているが、(19b)の「コロンブスの到達した地はアメリカだった」というのは、アメリゴ・ヴェスプッチの航海によって、コロンブス以後明らかになった事実である。したがって、コロンブスの信念世界にはアメリカなどという地名はなく、その意味では、コロンブスがアメリカはインドだと信じていたという可能性は全くないということになる。この場合、Americaも含めて補部節の内容はすべて、(20)に示すようにコロンブスの私的表現として解釈される。

- (20) Columbus believed that <priv America was India>.

しかし一方で、(19c)が真になる解釈も可能である。それは、Americaという表現がコロンブスの頭の中の概念に対応するのではなく、伝達者が自らの知識にもとづいて「現在でいうアメリカ」という意味で用いているという解釈である。この場合は、(21a)に示すように、コロンブスの私的表現の中に伝達者

の公的表現として America が挿入されていることになる。この America は本来コロンブスの私的表現中にはないので、そこから取り出した (21b) と実質的に同様の解釈を受ける ((21b) の it はもちろん「伝達者のいう America」に対応する指示対象を指す)。

- (21) a. Columbus believed that <priv [pub America] was India>.  
 b. Columbus believed *of America* that <priv it was India>.

(20) では、伝達者はコロンブスの思いをコロンブスの私的表現だけで報告しているのに対し、(21) では、コロンブスの思いを現在でいうアメリカとの関係で語っていることになる。その際の伝達者の意図は、おそらく、コロンブスが自分の到達地に関してもっていた信念を取り上げ、それが誤っていたということ聞き手に伝えることだと思われる。したがって(21)は、(22)のように *falsely*, *incorrectly*, *wrongly* などの伝達者の評価を表す表現を用いた文と語用論的に等価な機能を果たすと考えられる。

- (22) a. Columbus {*falsely/incorrectly/wrongly*} believed that America was India.  
 b. Columbus {*falsely/incorrectly/wrongly*} believed *of America* that it was India.

このような考え方を発展させると、「他者の思いを話し手がどのように受け止め、伝えるか」という「主観の客体化」に関する理論を構築することが可能になる。次節では、それについて英語の場合を中心に見ていきたい。

### 3. 主観の客体化

#### 3.1. 理論的要点

まず、主観の客体化に関する理論的要点を述べると次のようになる。

話し手の、事態に対する思い（主観）を表す言語表現のレベルは私的表現である。私的表現は、当該私的自己の思いを表現するという意味において「主観的」である。しかし、話し手が他者の「私的表現＝主観」を報告するとき、その主観は、報告者の話し手（公的自己）にとっては対象化、つまり、「客体化」

されることになる。話し手は客体化された主観に対して、次の三通りの態度をとることができる。

- (23) a. 客体化された主観を受け入れて、それに同調する(客観的用法Ⅰ).
- b. 客体化された主観を単に報告する(客観的用法Ⅱ).
- c. 客体化された主観に同調しない、あるいは同調するのを躊躇する(客観的用法Ⅲ).

以上が要点だが、これによって、本来的に主観的な表現が客体化されるとどのように解釈されるかが説明可能となる。以下、主に英語からの例をもとに考察していく。

### 3.2. 英語の認識的法助動詞の主観的用法と客観的用法

最初の例として、英語の認識的法助動詞（たとえばmayやmustなど）の主観的用法と客観的用法の区別について考えたい。この区別はLyons（1977）によるもので、認識的法助動詞の「主観的」用法は、それが表す認識的判断が話し手個人の判断基準に帰される場合であり、「客観的」用法は、一般的判断など話し手以外の判断基準に帰される場合をいう（具体例はすぐ後で見る）。この区別に関する研究は多くあるが、その中で、特にVerstraete（2001）はこの区別に反対し、認識的法助動詞は、（発話行為主体としての）話し手に限らず、何らかの「主体」の判断を表すという意味で常に「主観的」であると考えられる。このような違いが出てくるのは、Lyonsのいう「話し手」が発話行為レベルの概念であるのに対し、Verstraeteのいう「主体」は認識判断レベルの概念であることの違いによる。

私的自己・公的自己論の観点に立つと、LyonsとVerstraeteの立場は次のように統合することができる。

- ①「話し手」は私的自己（＝認識主体）と公的自己（＝伝達主体）に解体される。
- ②認識的法助動詞は、私的自己の認識的判断を表すという意味で（語彙的には）主観的表現である。しかし、
- ③私的自己の認識的判断をその自己とは異なる話し手が報告する文脈に生じると、Lyonsのいう「客観的」用法となる。

つまり、この問題は、私的自己の思いを公的自己在どのように受け止めるかという、より一般的な問題の特殊なケースであり、したがって、3.1節に示したアプローチによって扱うことが可能なのである。

認識的な *may* を例にとり、具体的に述べたい。Huddleston and Pullum (2002) によれば、例 (24a) は主観的用法の例で、話し手個人の判断を表し、日本語では (24b) のような訳になる。一方、(25a) は客観的用法の例で、一般に共有されている判断を表す。この場合日本語訳では (25b) のようになり、伝聞を表す「らしい」や「ようだ」を付け加えることで、話し手個人に帰される判断でないことを明示する必要がある。

- (24) a. He *may* have left it downstairs: I'll just go and see.  
 b. 彼はそれを下に忘れてきたのかもしれない。ちょっと見に行ってくるよ。
- (25) a. He *may* have misled Parliament: there's going to be an inquiry.  
 b. 彼は議会を欺いたのかもしれないらしい。調査が行われるようだ。

ここでの分析では、まず、主観的用法は次のように特徴づけられる。

- (26) 主観的用法：話し手が自分の思い（主観）を表現し、それを聞き手に伝えるので、公的自己 (PubS) と私的自己 (PrivS) が同一となる。これを PubS = PrivS と表す。

そうすると、(24a) の主観的用法は (27a) のように表示でき、この場合私的自己と公的自己在同一なので、*may* のもつ可能性判断は公的自己在と結びつき、それを聞き手に直接伝えるので、その伝達様式は、(27b) のように I SAY TO YOU で表せる陳述行為である<sup>5</sup>。

- (27) a. [pub<sub>i</sub> <priv<sub>i</sub> He may have left it downstairs>] (PubS = PrivS)  
 b. [pub<sub>i</sub> I SAY TO YOU <priv<sub>i</sub> He may have left it downstairs>]

一方、(25a) は (23a) に示した客観的用法 I にあたる。より詳しく言うと、次のようになる。

- (28) 客観的用法 I : 話し手が (特定あるいは不特定の) 他者の思い (主観) を受け入れ, それを聞き手に伝える. 公的自己と私的自己是異なるが, 公的自己はその私的自己の思いを受け入れる. これを PubS < PrivS と表す.

この場合, 話し手は他者の「主観を共有」する, つまり, 間主観的になるので, その意味でより客観的になると言える. そうすると, (25a) の客観的用法は (29a) のように表示でき, may の表す可能性判断は不特定の他者 (つまり任意の私的自己) に帰されるが, 話し手はその判断に同調し, それを間接的に聞き手に伝えることになるので, その伝達態度は (29b) のように I UNDERSTAND と表すことができる.

- (29) a. [pub<sub>i</sub> <priv<sub>j</sub> He may have misled Parliament>] (PubS < PrivS)  
 b. [pub<sub>i</sub> I UNDERSTAND <priv<sub>j</sub> He may have misled Parliament>]

I understand は人から得た共有情報を聞き手に伝える機能を果たす. 2.2 節で見たように, 英語は定形節の人称・時制が公的自己の存在を保証するので, I understand のような公的表現が明示されなくても, (29a) は公的自己による報告と解釈されるわけである. つまり, 客観的用法とされる (25a) は, 伝達節のない自由間接話法の一つと見なせるということである. それに対し, 私的自己中心の日本語では, 公的自己の存在を文法的に保証する必要があるので, (25b) の「らしい」のように, 公的自己の態度に応じてそれを示す何らかの言語的マーカーが必要になるのである (関連する詳細な議論は, Hirose (2015) や廣瀬 (2017b) を参照).

### 3.3. 心理述語の主観的用法と客観的用法

英語の認識的法助動詞と同様に, lonely, sad, happy などの心理述語も, 私的自己の心理を表すという意味で (語彙的には) 主観的表現である. しかしこの場合も, 私的自己の心理をその自己とは異なる話し手が報告する文脈に生じると, 客観的用法となる.

まず, 心理述語の主観的用法は, 次の例に見られるように, 一人称現在形で用いられる場合である. この場合, 話し手は自らの心理を表出し, かつ, それを聞き手に伝えるので, 私的自己と公的自己が同一になる. これを表示したの

が(30a)であり、(30b)のI SAY TO YOUはその際の公的自己の陳述的態度を語用論的に補ったものである。

(30) I am lonely.

- a. [pub<sub>i</sub> <priv<sub>i</sub> I am lonely>]. (PubS = PrivS)
- b. [pub<sub>i</sub> I SAY TO YOU <priv<sub>i</sub> I am lonely>].

私的自己中心の日本語では、話し手が「さびしい」と言うだけでは私的自己の心理表出に過ぎず、表現形式としては伝達性をもたない。それに対し、公的自己中心の英語では、I am lonely.という発話自体が伝達性をもち、自己の心理表出とともに心理報告も同時に行われるのである。したがって、英語の(30)は、強いていえば、「さびしいよ」とか「さびしいです」などの日本語に対応すると考えられる。

次に、他者の心理報告については、(23a)の客観的用法Ⅰに対応する場合と、(23b)の客観的用法Ⅱに対応する場合がある。心理述語の客観的用法Ⅰにあたるのは、次の例に見られるように、一人称以外の他者について、その私的自己の心理を断定的に報告する場合である。この場合、公的自己としての話し手は他者の心理を知り、それを受け入れて、聞き手に伝えることになる。これを表示したのが(31a)であり、(31b)のHE THINKS/SAYSは伝聞等に基づく公的自己の断定的態度を語用論的に補ったものである。

(31) He is lonely.

- a. [pub<sub>i</sub> <priv<sub>j</sub> He is lonely>]. (PubS < PrivS)
- b. [pub<sub>i</sub> HE THINKS/SAYS <priv<sub>j</sub> He is lonely>].

英語では、HE THINKS/SAYSの部分が言語化されないと、He is lonely.は伝達節のない自由間接話法と解釈され、それによって、話し手は他者の心理を受け入れ、それをそのまま聞き手に報告しているという意味が出てくることになる。私的自己中心の日本語では、他者の心理を報告するときは、報告者としての公的自己の存在を保証する言語的マーカーが必要になるので、英語の(31)に対応する日本語では、(32)のように、下線を引いた表現が不可欠である。

(32) 彼は、さびしい らしい / そうだ / ようだ / のだ / って。

他者の心理報告にもかかわる客観的用法Ⅱは、一般的に、次のように特徴づけることができる。

- (33) 客観的用法Ⅱ：話し手は他者の思いを知り、それを聞き手に伝えるだけで、他者の心理を受け入れているかどうかは定かではない。これを PubS > PrivS と表す。

この場合は、上の(31)とは異なり、(34)のように伝達節が明示される通常の間接話法になり、その意味関係は(35)のように表示できる。He thinks/says という伝達節を保持することによって、話し手は中立的な報告態度をとることが可能となる。

- (34) *He thinks/says he is lonely.*

- (35) [pub<sub>i</sub> He thinks/says <priv<sub>j</sub> he is lonely>]. (PubS > PrivS)

He thinks/says のような伝達節があるかないかで、公的自己としての話し手の伝達態度が異なることを実証するために、次の日本語文の英語訳について考えてみよう (Hirose 2015; 廣瀬 2017b 参照)。

- (36) 彼は教師になりたいと思っている。

この文は他者の願望を報告する文である。日本語では、願望述語「たい」は私的自己の心理表出しか表せないので、他者の願望を報告するためには、報告者としての公的自己の存在を保証するのに、「(と) 思っている」という伝達節は不可欠である (それを省略した「\*彼は、教師になりたい」は容認されない)。ところが英語では、(37a)のように伝達節のついた通常の間接話法と、(37b)のように伝達節のない自由間接話法の両方が可能である。

- (37) a. He thinks he wants to be a teacher.  
b. He wants to be a teacher.

伝達節のない(37b)では、話し手が当人の願望を現実的なものとして受け入れているのに対し、伝達節のある(37a)ではその限りでないことは、(38a)のよ

うな文には矛盾しない読みが可能なのに対し、(38b)は矛盾する読みになるという事実によって示される。

(38) a. He thinks he wants to be a teacher, but I'm not sure he really wants to.

b. ??He wants to be a teacher, but I'm not sure he really wants to.

一方、日本語の(36)では、「と思っている」が必要なのは、他者の心理を報告する報告者の存在を保証するためなので、当人の願望を話し手が現実的なものと見なししていても、そう言わざるをえない。実際、日本語では次の(39)のような文は矛盾する解釈のほうが優勢である。つまり、(39)が対応するのは(38a)ではなく、(38b)と言える。

(39) ??彼は教師になりたいと思っているが、本当になりたいのかどうか、私には分からない。

英語の(38a)のように、(39)を矛盾しない文に変えるには、「と思っている」の後に推量の助動詞「ようだ」などを入れて言う必要がある。

(40) 彼は教師になりたいと思っているようだが、本当になりたいのかどうか、私には分からない。

(40)では、「と思っている」が公的自己の存在を保証しているので、推量の「ようだ」は、当人の願望の妥当性について話し手自身は確信のないことを示す働きをしていると考えられる。

### 3.4. 間接話法引用部の場合

前節では、例(34)のように伝達節のついた通常の間接話法は、その引用部が表す私的自己の思いを公的自己が中立的に報告するという客観的用法Ⅱにあたるということを述べた。しかしながら、通常の間接話法でも、(41)におけるようなtruly, correctly, rightlyなどの伝達者の評価を表す副詞を伝達節につけると、(28)に示した客観的用法Ⅰの解釈となる<sup>6</sup>。これを表示したのが(42a)であり、そこでは間接話法引用部の私的表現が公的表現のなかに入れ込まれて

いることを示している。また、(42b)のI BELIEVEは、(42a)の間接話法引用部の思いを公的自己としての話し手が受け入れ、発話時において、それに同調する態度を表すものである。

- (41) Amerigo Vespucci {*truly/correctly/rightly*} believed that the land Columbus reached was not India.
- (42) a. [pub<sub>i</sub> Amerigo Vespucci {*truly/correctly/rightly*} believed that [pub<sub>i</sub> <priv<sub>j</sub> the land Columbus reached was not India>]]. (PubS < PrivS)
- b. [pub<sub>i</sub> I BELIEVE <priv<sub>j</sub> the land Columbus reached was not India>].

この場合、(42a, b)の表示からも分かるように、間接話法引用部の私的表現は伝達者の公的表現の中に組み込まれているので、次の(43)のように、引用部自体を主節にし、伝達節を挿入表現的に変えることが可能となる。

- (43) The land Columbus reached was not India, Amerigo Vespucci {*truly/correctly/rightly*} believed.

例(41)とは正反対に、2.3節で言及した次の例(= (22a))は、(23c)の客観的用法Ⅲにあたる場合である。

- (44) Columbus {*falsely/incorrectly/wrongly*} believed that America was India.

客観的用法Ⅲは、一般的に、次のように特徴づけることができる。

- (45) 客観的用法Ⅲ： 公的自己と私的自己が異なり、公的自己が私的自己の思いに同調しない、あるいは同調するのを躊躇する。これを PubS ≠ PrivS と表す。

例(44)では、*falsely*などの評価副詞により、公的自己の話し手がコロンブスの私的自己に同調しないことが明示されている。これを表示したのが(46a)で、(42a)の場合とは異なり、コロンブスの私的表現全体が公的表現に取り込まれ

ることはなく、Americaのみが公的自己に帰される。これによって、公的自己にとって「アメリカ」である地をコロンブス自身は「インド」だと誤解していたということが示される。(46b)のI DON'T BELIEVEは、公的自己が当該思いを受け入れない非同調の態度を表す。

- (46) a. [pub<sub>i</sub> Columbus {*falsely/incorrectly/wrongly*} believed that <priv<sub>j</sub> [pub<sub>i</sub> America] was India>]. (PubS ≠ PrivS)  
 b. [pub<sub>i</sub> I DON'T BELIEVE <priv<sub>j</sub> [pub<sub>i</sub> America] was India>]

この場合、引用部全体は公的表現の中に組み入れられていないので、(43)とは異なり、引用部を主節に繰り上げて、伝達節を挿入表現的にすることはできない。したがって、(47)のような文は容認されない。

- (47) \* America was India, Columbus {*falsely/incorrectly/wrongly*} believed.

最後に、knowやregretなどの叙実動詞が間接話法をとる(48)のような場合について考えてみよう。

- (48) John {*knows/regrets*} that Patty left early.

叙実動詞は、その補部が事実前提をもつと話し手が見なすので、この場合は客観的用法Iに対応する。したがって、(48)も(49a)のように表示され、間接話法引用部はジョンの私的表現であるとともに、伝達者の公的表現の中に組み入れられる。さらに、この場合は、話し手が私的自己の思いに同調するだけでなく、その思いが事実前提をもつので、当該思いに対する公的自己の態度はI BELIEVEではなく、(49b)のようにI KNOWと表すのが適切である。

- (49) a. [pub<sub>i</sub> John {*knows/regrets*} that [pub<sub>i</sub> <priv<sub>j</sub> Patty left early>]]. (PubS < PrivS)  
 b. [pub<sub>i</sub> I KNOW <priv<sub>j</sub> Patty left early>].

以上のほかにも、間接話法引用部にかかわる主観性の問題は多くあるが、その詳細な議論とデータについては、Hirose (1986)を参照されたい。

### 3.5. 問い返し疑問文・確認疑問文・反論的疑問文の場合

前節では、公的自己が私的自己の思いに同調しない、あるいは同調するのを躊躇する客観的用法Ⅲが間接話法引用部に見られる場合を論じたが、本節では、この用法が「問い返し疑問文」、「確認疑問文」、「反論的疑問文」の場合にも見られることを示したい。

まず、問い返し疑問文から見ると、(50B)がその例で、日本語では(51)のように、上昇音調を伴う「って?」を用いて訳される。日本語訳からも分かるように、この場合、mayの可能性判断は公的自己が問い返すことによって棚上げにされる。これは、話し手Aの述べた思いを話し手Bが受け入れるのを躊躇するからである。

- (50) A: Alfred may be unmarried.  
 B: Alfred may be unmarried?  
 (51) アルフレッドは、未婚かもしれないって?

したがって、(50B)に見られる主観の客体化は(52a)の表示で示され、その際の公的自己の伝達態度は(52b)のようにDID YOU SAYと表すことができる。

- (52) a. [pub<sub>i</sub> <priv<sub>j</sub> Alfred may be unmarried> ?] (PubS ≠ PrivS)  
 b. [pub<sub>i</sub> DID YOU SAY <priv<sub>j</sub> Alfred may be unmarried> ?]

確認疑問文については、認識的用法のmightを含む(53a)がその例で、日本語では(53b)のように、上昇音調を伴う確認の終助詞「の?」を用いて訳される。この場合は、mightのもつ可能性判断は他者の私的自己に、その判断に対する疑問は話し手の公的自己に結びつく。

- (53) a. Might Alfred be unmarried?  
 b. アルフレッドは、未婚かもしれないの?

したがって、(53a)に見られる主観の客体化は(54a)の表示で示されるが、Might Alfred...?という疑問形式の部分には、可能性判断の主体である私的自己に帰されるのではなく、確認を行う公的自己に帰されることになる。その際、公的自己の伝達態度の中身は文脈によって異なり、(54b)のようにDO YOU

THINKとすれば、聞き手の判断の確認、(54c, d)のようにAM I RIGHT TO UNDERSTAND (～と理解していいか) やIS IT THAT (～ということか) とすれば、不特定の私的自己の判断 (つまり、一般に共有可能な判断) の確認に対応する。

- (54) a. [pub<sub>i</sub> <priv<sub>j</sub> [pub<sub>i</sub> Might Alfred] be unmarried> ?] (PubS ≠ PrivS)  
b. [pub<sub>i</sub> DO YOU THINK <priv<sub>j</sub> Alfred might be unmarried> ?]  
c. [pub<sub>i</sub> AM I RIGHT TO UNDERSTAND <priv<sub>j</sub> Alfred might be unmarried> ?]  
d. [pub<sub>i</sub> IS IT THAT <priv<sub>j</sub> Alfred might be unmarried> ?]

なお、Swan (2005: 316) が指摘するように、可能性判断のmayはmightと異なり、通常、疑問文では用いられない。したがって、(55a)の疑問文ではmayは容認されない。その場合、私的自己の可能性判断は、たとえば(54b)のDO YOU THINKの部分を言語化して、(55b)のように質問することになる<sup>7</sup>。

- (55) a. {Might/\*May} you go camping this summer?  
b. Do you think you {might/may} go camping this summer?

最後に、反論的疑問文の場合をみておきたい。確信的判断を表す認知的用法のmustが(56B)におけるWhy must you be getting old?のような疑問文に生じると、相手の言ったことに反論することになり、日本語訳では、(57B)に示されているように、「どうしてそんなことを言うんだ」というような意味合いになる((56)の英語例と(57)の日本語訳はどちらも『ジーニアス英和辞典第4版』mustの項から借用した)。

- (56) A: I must be getting old.  
B: Why must you be getting old? Perhaps you're just tired.  
(57) A: 私は年を取ってきたにちがいない。  
B: どうしてそんなことを言うんだ。たぶんただ疲れているだけだよ。

この場合、mustのもつ確信的判断はAの私的自己に帰されるのに対し、whyと

must you be...?の疑問部分は反論する公的自己に帰される。したがって、主観の客体化分析に基づくと、Why must you be getting old?は(58a)のように表示でき、公的自己としての話し手はwhyによって、mustのもつ確信的判断の根拠を問うことになるので、その伝達態度は(58b)に示したWhy DO YOU THINK/SAYのように表すことができる（(58b)で[pub<sub>i</sub> you]となっているのは、当該私的自己が公的自己から見て二人称になるからである）<sup>8</sup>。

- (58) a. [pub<sub>i</sub> Why <priv<sub>j</sub> [pub<sub>i</sub> must you] be getting old> ?] (PubS ≠ PrivS)  
 b. [pub<sub>i</sub> Why DO YOU THINK/SAY <priv<sub>j</sub> [pub<sub>i</sub> you] must be getting old> ?]

mustに限らず、主観的判断の強い表現なら同じような現象が見られるのを示すのが(59)のような例である。Kiparsky and Kiparsky (1970) が指摘するように、(59)は(a)と(b)の二通りに曖昧である。

- (59) Why is he an idiot?  
 a. Why is it a fact/true that he is an idiot?  
 b. Why do you think he is an idiot?

(59a)は、彼がばかであることを話し手は事実だと思っており、その事実に対する理由を尋ねる読みであり、日本語で分かりやすく訳すと、「彼はばかなんだけど、それはどうしてなの?」というようになる。この場合、事実の説明として、たとえばBecause his brain lacks oxygen.などと答えることができる。一方(59b)では、話し相手は彼はばかだと思っているけれども、話し手自身はその思いをすぐには受け入れられないので、その思いの根拠を問いただす読みであり、日本語で分かりやすく訳せば、「どうして彼はばかだと言えるの?」のようになるだろう。この場合想定される答えは、たとえばBecause he failed this simple test for the third time.のように、主観の根拠を提示するものとなる。

私的自己・公的自己論の観点から分析すると、(59a)と(59b)の意味はそれぞれ(60)と(61)のように表示することができる。

- (60) a. [pub<sub>i</sub> <priv<sub>i</sub> Why is he an idiot?>] (PubS = PrivS)

- b. [pub<sub>i</sub> I ASK YOU <priv<sub>i</sub> Why is he an idiot?>]  
 (61) a. [pub<sub>i</sub> Why <priv<sub>j</sub> [pub<sub>j</sub> is he] an idiot? > ?] (PubS ≠ PrivS)  
 b. [pub<sub>i</sub> Why DO YOU THINK <priv<sub>j</sub> he is an idiot? > ?]

(60)では、話し手自身の私的自己がWhy is he an idiot?という疑問を頭の中にもっており、その主観的疑問を公的自己としての話し手が聞き手に質問として投げかけているという意味であり、この場合は私的自己と公的自己が同一と解釈されるのである。そして、その際の公的自己の伝達態度は(60b)のようにI ASK YOUで表される。一方(61)では、he is an idiotという思いは話し相手の私的自己に帰されるが、その思いに対し、公的自己としての話し手がWhy is he ...?という質問をぶつけて、話し相手にその思いの根拠を求めていることになる。したがって、その際の公的自己の伝達態度は、(61b)のようにWhy DO YOU THINK ...?と表せるのである。

ちなみに、Why is he an idiot?をグーグルで検索すると、ヒットする例はほとんどが、次の(62)のように、(59b)の主観読みで用いられており、(59a)の事実読みで用いられているものは、(63)などほんの数例しかない。

- (62) - Natasha is so stupid!  
 - Why?  
 - She married an idiot!  
 - *Why is he an idiot?*  
 - Do you think it's a luck to marry a stupid woman?  
 (<https://www.engvid.com/ielts-writing-3-essay-types/>)  
 (63) At the risk of sounding old, who is he and *why is he an idiot?*  
 (<https://rebrn.com/re/enough-said-5412334/>)

これは、idiotがきわめて主観性の強い判断を表す語だからである。それに対し、客観的な職業を表すteacherについては、Why is he a teacher?をグーグルで検索すると、ヒットする例はほぼ全て(64)のように、「彼はどのようにして先生をしているのか」という事実を問う発話として用いられている。

- (64) I know they mention that he is way overqualified to be a teacher, so *why is he a teacher?* Is it really hard for someone like him to find a

better job?

([https://www.reddit.com/r/FanTheories/comments/2c7ua3/why\\_is\\_walter\\_white\\_a\\_teacher\\_breaking\\_bad/](https://www.reddit.com/r/FanTheories/comments/2c7ua3/why_is_walter_white_a_teacher_breaking_bad/))

このように、客観的事実と思われる事柄とは対照的に、主観性の強い判断を他者から投げかけられると、われわれは多くの場合その思いを共有するのを少なくとも躊躇するため、その主観的判断の根拠を問いたくなるのである<sup>9</sup>。

### 3.6. 日本語の場合

これまで英語の場合を中心に論じてきたが、最後に、日本語の場合についてごく簡単に述べておく。日本語では、客体化された主観に対する公的自己の態度に応じて、(25b)における伝聞表現の「らしい」や「ようだ」をはじめとして、それを示す言語的マーカーが不可欠であり、例(32), (36), (51), (53b), (57B)などの日本語訳下線部の表現がそれにあたる。これは日本語が私的自己中心のため、公的自己の存在を文法的に保証する必要があるからである。一方、公的自己中心の英語では、公的自己の存在自体は人称や時制形式によって文法的に保証されるので、すでに見たように、公的自己の態度部分は語用論的に補われさえすればよい、ということになるわけである<sup>10</sup>。

## 4. まとめ

本稿では、前半で私的自己・公的自己論の概要を示し、後半ではその発展的応用として主観の客体化に関する理論を提示し、その現象を扱うには、私的自己・公的自己と私的表現・公的表現の区別が不可欠であることを見た。

1節の「はじめに」でも述べたように、私的自己・公的自己論は、現在、言語使用の三層モデルという、文法と語用論の関係に関する一般理論に発展しているので、本稿で示した主観の客体化に関する理論も、三層モデルの中に位置づけることができるものである。三層モデル自体は類型論的な研究にも様々な点で新たな視座を与えるものと思われるので(廣瀬ほか(2017)所収の諸論文や納谷・石田(2018), 石田・納谷(2018), 五十嵐(2018)など参照)、主観の客体化に関する理論についても、日英語以外の言語に適用するとどのようになるか、という点も今後考えていくべきテーマの一つとなる。

## 注

- 1 主観の客体化に関する最初のアイデアを発表したのは、2013年12月8日に筑波大学で開催された「多言語記述のための主観性シンポジウム」における講演「言語使用の三層モデルと主観の客体化」においてであった。本稿はその時のアイデアを修正発展させたものである。米国サンノゼ州立大学のKevin Moore氏には、本稿であげている英語例文や英語での書き換えについて筆者の質問に答えていただき、有益な示唆をいただいた。また、筑波大学の和田尚明氏は本稿の草稿に目を通し、貴重なコメントをくださった。ここに記して両氏に謝意を表す。本研究は、JSPS科研費18K00637の助成を受けたものである。
- 2 従来の拙論では、「直接語法は公的表現の引用が可能」というのではなく、「直接語法は公的表現の引用である」と断定していたが、これだと仮説として強すぎるとの指摘が今野(2017)においてなされている。今野は、英語のtellとsayの違いとの関係で、引用動詞が単に「音声を発する」(utter)という意味を際立たせるときは、私的表現も直接引用の対象となることを示している。詳しくは同論文を参照されたい。
- 3 公的自己・私的自己と時制の関係に関する詳細な議論は、特にWada(2001)や和田(2002, 2017)を参照されたい。
- 4 例(9)の2行目の「自分で」という表現における「自分」は私的自己を表す用法ではなく、再帰的用法の一種である。「自分」の多義性については、廣瀬(1996, 1997)やHirose(2002, 2014, 2018)を参照されたい。
- 5 (27)および以下で、添字のiやjは、当該の私的表現・公的表現が誰に帰されるかを示す。したがって、(27)のようにpubもprivも同じiを付されるときは、公的表現と私的表現が同一の自己に帰されることになるので、PubS = PrivSとなる。
- 6 以下の議論は、Hirose(1986)において「補部命題に対する話し手の命題態度の理論」(the theory of the speaker's propositional attitudes toward complement propositions)と呼ばれていた考え方とそれにかかわるデータを部分的に活用し、発展させたものである。
- 7 Swanは、mightについてはどちらも可としながらも、(55a)の形のほうがより形式ばった言い方だとしている。アメリカ人言語学者のKevin Moore氏に確認したところ、氏もSwanとほぼ同様の見解で、氏自身は(55b)のほうがより普通だという。
- 8 Kevin Moore氏によれば、この例についても、Why must you be getting old?というよりは、(58b)を言語化したWhy do you think/say you must be getting old?というほうが氏自身にはより自然とのことである。
- 9 本節では、問い返し疑問文、確認疑問文、反論的疑問文の場合に分けて考察してきたが、これらはすべて山口(2009)のいう「エコー発話」の事例と見なすことができる。山口は、エコー発話を対話における自由間接語法と特徴づけ、「対話者のことばを自由間接的に一人称を話者のコンテクストに合うように変更し、しかも伝達節を用いなくて引用することによって、対話者のことばに対する態度を表明する」文法形式と定義する(山口2009:48)。そのうえで、「エコーは、ほかの話法と同様、対話者のことばだけでなく、思考を提示できる」という点にも注意を向けている(同書:54)。これは、まさに、エコー発話の対

象となるのが本来ことばそのものではなく、ことばによって伝えられる、あるいは、ことば（や表情・行動など）から推論される思い（主観）であるからにほかならない。だからこそ、エコー発話には私的自己による私的表現が必ず関与するのである。

- 10 公的自己の伝達態度部分が日本語では言語的に明示されなければならないのに、英語ではそれが語用論的に補われて解釈できるという違いは、特に、モダリティ論・発話行為論に関する日英語対照研究において大きな意味合いをもつ。このような観点を踏まえて、和田（2017, 2018）では、心的態度としてのモダリティを表す助動詞を含む文が、英語では間接発話行為として解釈されやすいのに対して、日本語ではそれが難しいという事実（たとえば、英語ではWill you...?という意志の質問が依頼としても解釈されるのに対し、日本語では依頼には「～してくれますか」など依頼専用の表現を用いる必要がある）を指摘し、それを説明する詳細な分析を提案している。

### 【参考文献】

- Hasegawa, Yoko and Yukio Hirose (2005) “What the Japanese Language Tells Us about the Alleged Japanese Relational Self,” *Australian Journal of Linguistics* 25, 219-251.
- Hirose, Yukio (1986) *Referential Opacity and the Speaker’s Propositional Attitudes*, Liber Press, Tokyo.
- 廣瀬幸生 (1988a) 「私的表現と公的表現」『文藝言語研究・言語篇』第14巻, 37-56.
- 廣瀬幸生 (1988b) 「言語表現のレベルと話法」『日本語学』第7巻第9号, 4-13.
- Hirose, Yukio (1995) “Direct and Indirect Speech as Quotations of Public and Private Expression,” *Lingua* 95, 223-238.
- 廣瀬幸生 (1996) 「日英語再帰代名詞の再帰的用法について」『言語』第25巻第7号, 81-92.
- 廣瀬幸生 (1997) 「人を表すことばと照応」『指示と照応と否定』中右実（編）, 1-89, 研究社, 東京.
- Hirose, Yukio (2000) “Public and Private Self as Two Aspects of the Speaker: A Contrastive Study of Japanese and English,” *Journal of Pragmatics* 32, 1623-56.
- 廣瀬幸生 (2001) 「授受動詞と人称」『言語』第30巻第5号, 64-70.
- Hirose, Yukio (2002) “Viewpoint and the Nature of the Japanese Reflexive *Zibun*,” *Cognitive Linguistics* 13, 357-401.
- 廣瀬幸生 (2006) 「日記英語における空主語と主体化」『言葉の絆—藤原保明博士還暦記念論文集—』卯城祐司・太田一昭・太田聡・滝沢直宏・田中伸一・西田光一・山田英二（編）, 270-283, 開拓社, 東京.
- 廣瀬幸生 (2008) 「話者指示生と視点階層」『ことばのダイナミズム』森雄一・西村義樹・山田進・米山三明（編）, 261-276, くろしお出版, 東京.
- 廣瀬幸生 (2009) 「話者指示生と視点と対比—日英語再帰代名詞の意味拡張の仕組み—」『「内」と「外」の言語学』坪本篤朗・早瀬尚子・和田尚明（編）, 147-173, 開拓社, 東京.
- 廣瀬幸生 (2012) 「公的表現・私的表現と日英語の話法」『英語語法文法研究』第19

号, 20-34.

- Hirose, Yukio (2013) “Deconstruction of the Speaker and the Three-Tier Model of Language Use,” *Tsukuba English Studies* 32, 1-28.
- Hirose, Yukio (2014) “The Conceptual Basis for Reflexive Constructions in Japanese,” *Journal of Pragmatics* 68, 99-116.
- Hirose, Yukio (2015) “An Overview of the Three-Tier Model of Language Use,” *English Linguistics* 32, 120-138.
- 廣瀬幸生 (2016a) 「日英語における時間のメタファーと主観性—言語使用の三層モデルからの視点—」『言語の主観性—認知とポライトネスの接点—』小野正樹・李奇楠 (編), 19-34, くろしお出版, 東京.
- 廣瀬幸生 (2016b) 「主観性と言語使用の三層モデル」『ラネカーの (間) 主観性とその展開』中村芳久・上原聡 (編), 333-355, 開拓社, 東京.
- 廣瀬幸生 (2017) 「自分の言語学—言語使用の三層モデルに向けて—」『三層モデルでみえてくる言語の機能としくみ』廣瀬幸生・島田雅晴・和田尚明・金谷優・長野明子 (編), 2-24, 開拓社, 東京.
- Hirose, Yukio (2018) “Logophoricity, Viewpoint, and Reflexivity,” *The Cambridge Handbook of Japanese Linguistics*, ed. by Yoko Hasegawa, 379-401, Cambridge University Press, Cambridge.
- 廣瀬幸生・長谷川葉子 (2001a) 「日本語から見た日本人—日本人は『集団主義的か』— [上]」『言語』第30巻第1号, 86-97.
- 廣瀬幸生・長谷川葉子 (2001b) 「日本語から見た日本人—日本人は『集団主義的か』— [下]」『言語』第30巻第2号, 102-112.
- 廣瀬幸生・長谷川葉子 (2007) 「ダイクシスの中心をなす日本的自己」『言語』第36巻第2号, 74-81.
- 廣瀬幸生・長谷川葉子 (2010) 『日本語から見た日本人—主体性の言語学—』開拓社, 東京.
- 廣瀬幸生・島田雅晴・和田尚明・金谷優・長野明子 (編) (2017) 『三層モデルでみえてくる言語の機能としくみ』開拓社, 東京.
- Huddleston, Rodney and Geoffrey K. Pullum (2002) *The Cambridge Grammar of the English Language*, Cambridge University Press, Cambridge.
- 五十嵐啓太 (2018) 「言語使用の三層モデルから見た絵本の言葉」言語学講演会, 筑波大学, 2018年11月15日.
- 石田崇・納谷亮平 (2018) 「『人』と『モノ』の間の言語学—自己中心性と公的表現・私的表現の観点から—」『信学技報』HCS2018-41, 1-6.
- Kiparsky, Paul and Carol Kiparsky (1970) “Fact,” *Progress in Linguistics*, ed. by Manfred Bierwisch and Karl Erich Heidolph, 143-173, Mouton, The Hague.
- 今野弘章 (2017) 「デフォルト志向性の解除」『三層モデルでみえてくる言語の機能としくみ』廣瀬幸生・島田雅晴・和田尚明・金谷優・長野明子 (編), 69-89, 開拓社, 東京.
- Lyons, John (1977) *Semantics* 2, Cambridge University Press, Cambridge.
- 納谷亮平・石田崇 (2018) 「“OK, Google!” の言語学—言語使用の三層モデルから見たウェアクワードの特殊性—」『信学技報』HCS2018-9, 65-70.
- Sperber, Dan (2000) “Introduction,” *Metarepresentations: A Multi-disciplinary Perspective*,

- ed. by Dan Sperber, 3-13, Oxford University Press, Oxford.
- Swan, Michael (2005) *Practical English Usage, Third Edition*, Oxford University Press, Oxford.
- 内田聖二 (2011) 『語用論の射程—語から談話・テキストへ—』 研究社, 東京.
- Verstraete, Jean-Christophe (2001) “Subjective and Objective Modality: Interpersonal and Ideational Functions in the English Modal Auxiliary System,” *Journal of Pragmatics* 33, 1505-1528.
- Wada, Naoaki (2001) *Interpreting English Tenses: A Compositional Approach*, Kaitakusha, Tokyo.
- 和田尚明 (2002) 「時制現象から見た日英語比較—間接話法と物語文を中心に—」『茨城大学人文学部紀要 (コミュニケーション学科論集)』第12号, 21-36.
- 和田尚明 (2017) 「言語使用の三層モデルと時制・モダリティ・心的態度」『三層モデルでみえてくる言語の機能としくみ』廣瀬幸生・島田雅晴・和田尚明・金谷優・長野明子 (編), 44-68, 開拓社, 東京.
- 和田尚明 (2018) 「新しい学説はどのように外国語教育に貢献するのか—モダリティ・心的態度・間接発話行為の日英の違いを言語使用の三層モデルから説明する—」『日本語文法』第18巻第2号, 28-44.
- 山口治彦 (2009) 『明晰な引用, しなやかな引用—話法の日英対照研究—』くろしお出版, 東京.